

山への信仰における生と死の地域文化誌

—近世奈良の春日講と近世江戸の富士講の比較を通じて—

川合泰代*

摘要

本稿は、近世の人々の山への信仰の二事例を通じて、近世の日本人の空間・時間の感覚を再現するものである。近世奈良の春日講は、御蓋山・春日山を聖地として信仰していた。山は東方位に位置し、儀式は1月に行い、山は木々が青々と茂る春の風景が山に神仏の坐す証であるという文化を持っていた。かれらは、儀礼を通じて、「生」の文化に統一された時空間を生きていたのである。一方、近世江戸の富士講は、富士山を聖地として信仰していた。山は南西方位に位置し、山に登る儀式は夏に行い、山は阿弥陀佛の住む極楽浄土であった。彼らは儀礼を通じて、「死」の文化に統一された時空間を生きていたのである。かつての日本人にとって、空間・時間・人は、1つでつながっていたのである。

キーワード：山、信仰、空間、時間、感覚、江戸時代

はじめに

現代人は、近代以降に欧米からもたらされた空間・時間の考え方の中を生活している。空間は人間とは切り離されたものであり、時間は人間とは関係なく過去から未来へと直線的に進んでいくという感覚である。そして、空間と時間は別のものであり、空間と時間と人間はバラバラに分離して存在しているような感覚である。この空間・時間の感覚は、今の私たちにとっては当たり前のものであるが、おそらく江戸時代の人々にとっては当たり前では無かったと考えられる。

近代より前の時代、近世までの日本人は、東洋の思想を日本化させた思想に基づく考え方の中を生きていたと考えられる。「道」の思想と言ってもよいかもしれない。それは、空間は人間に影響を与える、空間の氣と人間の氣は共振するという考え方であり、また、時間は循環する、円環する、巡るという考え方である。この時間感覚は、60のサイクルの干支にも現れている。近世までの日本人の感覚は、空間と時間と人間は結びついて存在し、ある意味一体であるという感覚であったと考えられる。このような感覚を、現代人はほとんど有していない。

筆者はかつて、近世の聖地への信仰文化として、近世奈良の春日講と、近世江戸の富士講の研究を行った。近世奈良の春日講は、御蓋山・春日山を聖地とする集団であり、聖地春日山の木々が青々としている、象徴としての春の風景に神仏の存在を感じる思想をもつ集団であった。春日

*駒澤大学・東京学芸大学・明治学院大学 非常勤講師 E-mail : yasuyo28@mvp.biglobe.ne.jp

講はいわば、「生」にフォーカスした文化をもっており、一年のうちでその思想に合った日にちに儀式を行っていた。一方、近世江戸の富士講は、富士山を聖地とする集団であり、聖地富士山に極楽浄土のイメージを重ね合わせる集団であり、死に装束である白装束で夏の富士山に登拝した。富士講はいわば「死」にフォーカスした文化を持っており、一年のうちでその思想にあった日にちに儀式を行っていた。

本稿では、近世というほぼ同時期に、異なる地域で行われていた2つの集団の文化に着目し、この2つの集団の生と死の地域文化誌を読み解くことを通じて、現代人が失ってしまった空間・時間感覚を再考したい。

I 近世奈良の春日講—「生」の地域文化誌—

奈良において、興福寺や春日社の背後にある御蓋山と春日山は、今も昔も聖地である。この山々は、奈良盆地より地形的に高いところに位置し、奈良の人々が得る水の水源地にもあたる。図1は奈良の飛火野からみた御蓋山・春日山である。中心の三角形の山が御蓋山で、背後の屏風のような山が春日山である。近世までの奈良を描いた地図はほぼすべて御蓋山・春日山がある東を上にして描かれ、また風景図でもある春日宮曼荼羅も東を上にして描かれる。御蓋山・春日山は、近世までは所々に春日社や興福寺の施設があるのみで、聖地であり続けた。近代になると春日社と興福寺の神仏分離により、主に興福寺エリアであった春日山は聖地としての維持が一時期困難になったものの、現在は国立公園である奈良公園の管理下におかれ、春日山原生林として自然が保護をされており、春日社エリアであった御蓋山は近代以降も神域として維持され、現在も特別な時以外の人の入山は禁じられている。

聖地である御蓋山・春日山を、奈良の人々はどうのように信仰してきたのか。本稿では、川合(2006)をもとに、その文化を述べる。

中近世の奈良において、神仏は集合しており、春日社と興福寺は一体であった。中近世の興福寺は春日社のうちの春日若宮社の祭祀権をもっていた。また、興福寺と春日若宮社が一つになった「春日」の神仏が大和を守護しているという思想が、中近世の奈良の人々に共有されていた。



図1 春日の飛火野(春日野)からみた御蓋山と春日山(2018年3月筆者撮影)

現在においても、春日若宮おん祭りは奈良で一番大事にされているお祭りである。本稿で取り上げる奈良の町の春日講による春日への信仰は、この興福寺と春日若宮が一体となった「春日」への信仰であり、それは若宮さんへの信仰であった。本稿の春日講は、かすがこう、ではなく、しゅんにちこう、と発音される。中近世の「春日」は、しゅんにち、と発音されていたと想像される。しかしながら、この「春日」は近代の神仏分離により、現存しない。

表1 明治期に春日曼荼羅を所有した「町」

	町名	春日曼荼羅の種類	春日講
A	今小路町	鹿	—
B	今辻子町	鹿	—
C	小川町	鹿	—
D	角振新屋町	鹿、宮	●
E	元興寺町	鹿	▲
F	元林院町	鹿	—
G	北風呂町	宮	—
H	高畑町	鹿、鹿、宮	—
I	中院町	鹿、宮	▲
J	西御門町	鹿、鹿	—
K	西城戸町	鹿	▲
L	橋本町	宮	▲
M	東城戸町	宮	◎
N	東向中町	鹿、鹿、宮、宮	◎
O	東向南町	鹿、宮	●
P	光明院町	宮、宮	—
Q	南市町	宮	●
R	南袋町	鹿	—
S	餅飯殿町	宮	◎
T	脇戸町	鹿	●
U	京終町	鹿	◎

宮：春日宮曼荼羅

鹿：春日鹿曼荼羅

◎：近世に春日講があり、昭和38年頃にも活動が存在した

●：近世に春日講があったが、昭和38年頃には活動が存在しなかった

▲：昭和38年頃に春日講の活動が存在した

資料：山田（1981）、喜多野（1995）、奈良市教育委員会（2002）

表1は近世に奈良の町で春日講があったと推測される町である。町の多くが、かつては春日曼荼羅を所有していた。おそらく、春日講の本尊として使用していたと推測される。しかしながら現在、春日講を行う町は少なくなった。近代の神仏分離により「春日」本体が消滅したことにより、当事者たちも何を自分たちが信仰しているのか不明瞭になっていったことと関連すると考えられる。なお現在、かつての町の祭政一致の自治組織は、多くの場合、町の自治会に継承されている。

まず、近世の春日講の様子を、村井古道（喜多野徳俊訳・注）（1979）による元文5（1740）年の『南都年中行事』から紹介する。

「(正月部・・・筆者)廿一日 春日講 昔よりかすがこうと言わずに、しゅんにちと唱えてきた。当日南都の町々ごとに、会所あるいは頭屋などに集会して、各春日社に詣るのをその町の神事としている。あるいは十一日に執行い、また正、五、九月の両度に勤めるのも多い。皆その町の恒例によっている。」

現在でも春日講を行っている町は少ないが、その中で本稿では2001年の京終町の春日講の内容を紹介する。以下、筆者の聞き取り情報である。

京終町での2001年の春日講の参加家は8軒で、各家の当主が頭屋に集まって儀礼を行う。頭屋は一年交代である。参加は基本的に男性で、スーツなどの正装で参加する。2001年の場合、1月21日のお昼頃に参加者が集まり、頭屋の床の間に祭壇を造った。祭壇の上方と下方には、青竹の間に杉の葉を差し込んだものを飾った。これは儀礼の1時間前に儀礼の参加者が造ったもので、青々とした状態であった。祭壇の中心部に春日鹿曼荼羅を掲げ、その下方に柵を飾り、洗米、塩、御神酒を捧げた。床の間の床には大根、餅、みかん、牛蒡、里芋などの山の幸や、するめや鰹節などの海の幸を供えた。床の間の両端には頭屋座講のご神体と、頭屋の増田家の大黒さまを配した。2時ごろから儀礼が始まった。神主が一步前に出て祝詞などを唱え、ほかの参加者は後方に2列になって並んで座り、最後に一人ずつ柵を祭壇に捧げた。そののち頭屋で1時間ほど直会を行った。その後春日大社へ参詣し、京終町の春日燈籠を拝し、春日大社に油料と神楽料を納め、神楽を奉納した。その後料理屋にて再度直会を行い、夜の8時頃終了した。頭屋から参



図2 京終町春日講の祭壇 (2001年1月21日筆者撮影)

加者へ、土産として菓子が渡された。聞き取りでは、春日講の儀礼の意味は明確に認識されているわけではないようであった。なお、昔の京終町は春日若宮社で神楽を奉納し、春日大社へは参拝しなかった。

図2は京終町の春日講において、当屋の家の床の間に造られた祭壇である。中心の掛け軸は春日曼荼羅のうちの春日鹿曼荼羅である。春日曼荼羅は、御蓋山・春日山の杉や松などの常緑樹が青々と茂り、梅や花が咲き誇り、命に満ちあふれた状態で描かれたもので、木々が青々としているいわば春の風景が山に神仏が坐すことを示した曼荼羅である。この思想は中近世の「春日」に共有された思想である。この春日曼荼羅が祭壇の中心に飾られ、その祭壇の周

りを青竹や青々とした杉の葉で飾り、また榊が供えられていることから、この祭壇そのものが、山がいのちに満ちあふれたいわば春の風景こそが神仏の姿を現すという思想を表象していると読むことができる。

春日講は近世においては1年のうちに何度か行う事例もあったようであるが、現存する春日講はほとんど1月に行われている。いわば正月行事の一つである。正月は、陰陽の考え方に照らせば、陰が極まり陽に転じる時である。春日講の儀礼の日取りは、太陽の力が復活し、生命が復活する春の時期の儀礼であり、生のイメージとつながる日取りなのである。

聖地御蓋山・春日山は、人々の居住地からみて太陽が昇る東に存在し、日常の水の水源地でもある。また、春日講の儀礼は、一月という陰が陽に転じる、陽氣を重視した日取りである。そして、儀礼の祭壇は御蓋山・春日山の杉や松などの常緑樹が青々と茂り、梅や花が咲き誇り、いのちが満ちあふれた状態で描かれた春日曼荼羅を掲げ、祭壇そのものも青々とした杉や青竹で飾るものであった。近世の春日講の儀礼は、空間も時間も意味も、すべてが「生」にフォーカスした文化で統一されていた。

すべてが「生」のエネルギーで統一された儀式を行うことを通じて、人々は「生」のエネルギーを自分自身や、自分たちの時空間に取り込み、生命を復活させることを意図していたのだと推測される。

II 近世江戸の富士講―「死」の地域文化誌―

江戸・東京において、富士山は今も昔も特別な山である。富士山は、江戸・東京から南西方角に見える山であり、冬は太陽が沈む方位に当たる。江戸では、「半分は江戸のものなり富士の山」という言葉があるように、富士山は江戸の人々に親しまれた山である。図3は冬の東京からみた富士山である。富士山は、今も東京のいたるところで見ることができる。江戸を描いた絵図で



図3 東京から見える富士山
(東京都大田区多摩川浅間神社より, 2015年2月10日筆者撮影)



図4 小野照崎神社境内の富士塚。江戸時代の富士塚の形に類似
(2005年6月30日筆者撮影)

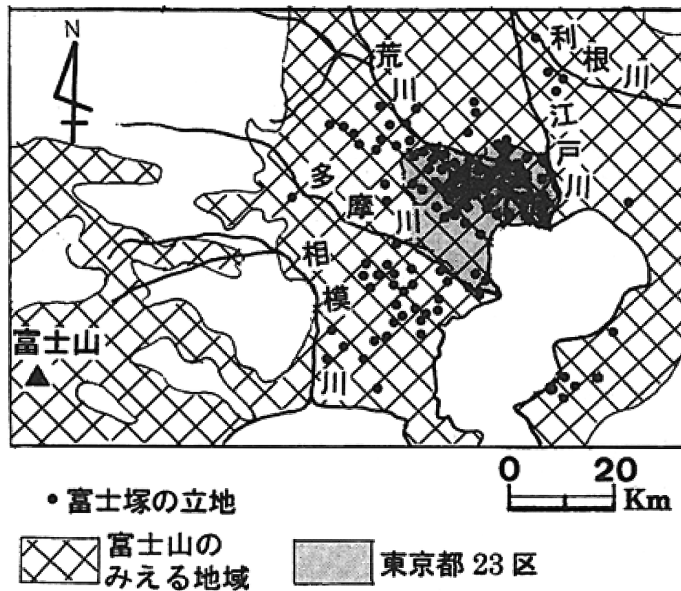


図5 関東平野の富士塚の分布
(日本常民文化研究所(1978, 1979)の富士塚のデータと, 山と地図のフォーラム(1999)の富士山可視マップにより作成)

は、富士山を上にして、その麓に江戸城その下に城下町を描く構図がよく見られる。江戸には富士見坂が多数存在し、葛飾北斎の描いた絵には、富士を背後に描いた江戸の町の描写が数多く見られる。この富士山を聖地とし、信仰してきたのが富士講である。

富士講は、聖地である富士山をどのように信仰していたのか。本稿では、川合(2001)、川合(2020)をもとに、その文化を述べる。

富士講は江戸・東京に多数存在し、また関東一円にも多数存在した。富士講の正確な数はわからないが、富士講が築造した富士塚という富士山の模造塚の数からおおよそ推測できる。図4は江戸時代の富士塚に類似すると考えられる小野照崎神社境内の富士塚である。富士塚は、富士山に登る体験と同じ体験ができる装置として築造された。富士塚は、東京23区内だけで70以上存

在し、関東一円では、少なくとも図5の分布数は確認されている。

まず、江戸の富士講の人々による富士山への信仰について、江戸で初めて富士塚を築造した高田藤四郎の語りを、天保6(1835)年、江戸の八島五岳による『百家崎行伝』から、述べる。

「富士行者藤四郎 駒込高田の町に藤四郎と云ひし者ありて、殊に富士山を信心し、七十五度登山したりしとぞ。・・・或人「いかなれば、斯富士山にのみ、数度のほり給ふぞ」と問ひければ、藤四郎答えて曰く、「世人佛法を信じて、極楽に往かん事を願ふもの多し。然れども、誰か一人極楽ゆきて、見て来る者なし。死しての向の事何ぞたのみならんや。富士は三国にただ一個の山にして、登れば最も天にちかく、是則ち、天上に生を得たる心地するなり。また、富士の八がふ目にありて、夜月の来迎を拝する時は、月中に三尊の如来現れ給ひ、五色の雲たなびき、其の尊き事、譬へんにもあらず。真に極楽といふは、ここより外にはあらじと思ひ待ふ。釈尊の説き給ひし極らくは、十萬億土の末にありて、凡人のゆきて拝む事能はず。我門が信ずる富士山の極楽は、一年に一度づつ拝まるるをもて、只管富士へ参登つかまつりぬ。但身のおこなひあしき悪人の登山するときは、忽ち山あれ震動して、時によりては、人を掴みて投げ落とし、去方の知れざるも亦多し。是則ち、富士の地獄なり。されば、地獄も極楽もこの山に有りて、外になし。是皆目前見るところにして、しふべからず。此のゆゑに、吾門年年登山いたすなり」と答へけるとぞ。」

江戸の富士講の人々にとって、富士山は極楽浄土そのものであり、生きながらにして天上に生を得る体験ができる場であった。一方で、悪人が登れば富士山がその人を投げ落とすものでもあった。日頃の自分自身の心と行いが、富士山に登ると富士山内で目の前に現れてくるのであった。極楽も地獄もこの山にあったのである。毎年富士山に登るのは、毎年自身が極楽浄土、天の世界を生きながらにして体験し、日常の行いを悪しくなく生きるためであったのだろう。極楽浄土を体感し、その体感を日常でも再現し実行し続けるためには、毎年の富士登山による体験は必要なものであったと想像される。

品川の富士講が使用してきたお伝えの中には、富士山と阿弥陀の極楽浄土をつなげる以下の言葉がある。「・・・三国の光の元を尋(たず)奴連者(ぬれば)(原文振り仮名あり)朝日に夕日富士の極楽 南無阿弥陀佛・・・」。三国とは世界の意味であることから、世界の光のはじまりの場所は富士山である、と語っていると読み解ける。富士山は中・近世、大日如来の住まう場所という意味があった。大日如来は世界の中心の如来であり、また大日如来は天照大神と同じであるという文化もあり、富士山は光と重なる文化が中世からあると推測される。このお伝えの言葉から、世界の中心の光を放つのは富士山であり、そこは阿弥陀佛の住まう極楽浄土であるという意味が読み解ける。

現在、東京で富士講を活動し続ける人々は少なくなった。その中で、現在でも富士講を行っている新宿区高田馬場にある丸藤宮元講の富士講の活動を紹介する。これは、2001年9月4日の筆者による聞き取りによるものである。

丸藤宮元講社の場合、先達は、井田清重氏である。氏は大正5年生まれで、2001年で87歳で

あった。富士登山回数は百数十回を越える。月拝みは、新宿区早稲田鶴巻町にある、井田氏の自宅で行なった。この講の月拝みは、毎月4日であり、特に9月4日は盛大に行なう。この日は、井田氏と同様に富士講の先達であった井田氏の父の命日にあたる。また、富士登拝は、8月4、5、6日に行う。この講の行事はすべて4日が意識されている。月拝みは夜7時から、井田氏の自宅に設けられた富士山の祭壇に対して行なう。祭壇の内部は、鳥居の奥に富士山の形をしたものがあり、その山頂に円形の鏡がおかれ、その上に社が祀られている。拝みでは、人々は富士登山を行なうときと同じ、行衣と呼ばれる白装束を着用し、鈴を片手に持ちながら、「不二山」という経文のようなものを、皆で読み上げていく。「不二山御傳」では、まず祓いの言葉から始まり、富士山への祝詞のようなもの等々を唱えた後、御十五首という富士山に対する歌を十五首唱える。まず「三国之光之元をたづぬれば 朝日に夕日 不二之極楽 南無仙元大菩薩様 一筋に御助け願上げ奉る」と、ここを非常にゆっくりと読み上げた後、他の歌を今までよりは早いペースで読み上げていく。このうち最後に「御體心中祈念之歌 志んちゆうのまことの道にかなひふば 日夜らいこうかつな新月」と読み上げ、ひとまず終了する。拝みは一時間ほどである。

図6は白装束を着た井田氏である。これは富士登山の時と同じ装束であり、またこれが死装束ともなる。図6の写真の背後に映るのが、井田氏の自宅にある富士講の祭壇である。富士講は何度も山に登ることが尊ばれる。月拝みや富士登拝の日取りは、井田氏の父である前の先達の他界の日を取っている。儀礼で唱える言葉には、品川のお伝えと類似の言葉があり、富士山が世界の光のはじまりであるとともに、富士山が極楽浄土であるという文化があることがわかる。最後に、まことの道にかなひふば、とあり、日々の暮らしの中で信者はまことの心を貫くことを誓い、そうすれば、日夜らいこう、つまり昼も夜も佛の来迎を得て、生きながらにして極楽浄土を生きることができると考えたと読むことができる。

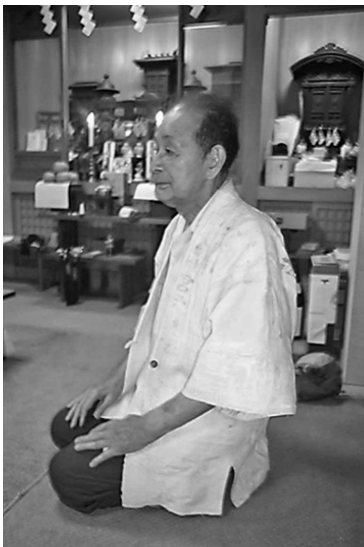


図6 富士講先達の井田清重氏
(2001年9月筆者撮影)

富士山は庚申年が御縁年であり、庚申年は江戸からも通常よりも多くの人々が富士山に登ったことが記録に残っている。江戸という場所からみて、富士山は方角でいうと庚申の方位にあたる。庚申は、陰陽五行でみれば金にあたり、西、切る、秋などの意味と通じ、陰陽でいえば陰にあたる。庚申の日は、寝ている間に自分の中にいる三尸が閻魔大王に自分の悪行を報告するため、自分の寿命が縮んでしまうのが嫌で、一晩中寝ずに過ごすという文化があり、日本では庚申待ち、庚申講などを行い、人々は夜に集い一晩中寝ずに過ごした。庚申は死の世界と通じる意味があったのである。

富士山は冬は雪に閉ざされ、夏しか登ることができない。富士講が富士山に登るのは7、8月頃の夏のみである。この時期は、夏至を過ぎ、夏から秋に転じていく時期、先

祖が俗世にもどるお盆の時期、陽極まって陰に転じる時期である。富士講による登山の時期は、死のイメージとつながるのである。

近世江戸の富士講で行われていた儀礼は、太陽の沈む方位である南西・西、陽が極まって陰に転じるお盆の時期、死装束である白装束、先達の命日の日に合わせた儀式の日取り、富士山を極楽浄土と見なす文化、庚申という陰の意味など、空間も時間もいわば「死」にフォーカスした文化で統一されていた。

なお、富士山は世界の光の始まりであり、佛の住まう極楽浄土であり、富士講の人々はその世界を登山を通じて生きながらに体験することを通じて、その極楽浄土を日常生活でも再現することを心がけており、その心とはまことの心を生きるということであったと想像される。修験道の文化は死と再生であると指摘されることが多いが、富士講の場合も儀式によって「死」を体験し、そのことにより新しく再生した心持ちで生きることが意図されていたのであろう。ここでいう死とは、俗世で悪しき心になった人としての自分の死であり、極楽浄土としての富士山を生きながらにして体験することを通じて、極楽浄土としての富士山と共振する自分自身に生まれ変わるという意味があったと推測される。

おわりに

近世の日本人は、山を聖地として信仰する文化をいたるところで構築していた。本稿で紹介した二事例は、共に自分が暮らす場所から日頃眺めている山を、聖地として信仰した事例であった。

同時期に展開した二事例のうち、春日講は、山は日が昇る東方位にあり、儀礼の日取りは一年で一番寒い時期から暖かくなっていく転換点であり、陰が陽に転じる正月頃に行われており、また山へ付与された意味は聖地である御蓋山と春日山の木々が青々と茂り、桜や梅が咲く、いわば春の風景が山に神仏が坐す証であるという文化であった。春日講は、空間も時間も聖地への意味も、すべていわば「生」のエネルギーに統一された文化であった。

一方富士講は、山は日が沈む南西・西方位にあり、儀礼の日取りは一年で一番暑い時期から寒くなっていく転換点であり、陽が陰に転じるお盆の頃に行われており、また山へ付与された意味は聖地である富士山は阿弥陀佛の住む極楽浄土であり、富士講の人々には一般人が死後に体験する極楽浄土の世界を、富士登山を通じて生きながらにして体験できるという意味が付与されていた。富士講は、空間も時間も聖地への意味も、すべていわば「死」のエネルギーに統一された文化であった。

かつての日本人は、山のことをお山と呼び、山を聖なるものとして見上げる感覚があった。そして山と人は関係の無い分離したものではなく、つながっているという感覚があった。それゆえに、山と接するときは心身を清める必要があった。自分の心身が山に投影されるからである。

また、かつての日本人は、空間と時間と人はつながっているという感覚があったと推測され

る。それゆえに、空間に与えられた意味につながる時間を儀式の日取りとして選択し、儀礼を行っていた。空間と時間と場所への意味がすべて一つのエネルギー、一つの氣でつながっていた、統一されていたのは、偶然ではなく、人々の感覚が空間と時間と人はつながっているという感覚がゆえの必然であったとも読むことができる。

現代人はこのような感覚を持ち合わせていないが、それは近代以降の思想に染まってしまったからであろう。今再び、かつての日本人の空間・時間感覚を再考すれば、欧米思想にない新しい価値観をこの日本から発信できるのではないかと夢想し、本稿を終える。

文献

- 川合泰代（2001）「富士講からみた聖地富士山の風景－東京都23区の富士塚の歴史の変容を通じて－」地理学評論 74A-6, 349-366 頁。
- 川合泰代（2006）「近世奈良町の春日講からみた『聖なる風景』－春日曼荼羅と儀礼の分布を通じて－」人文地理 58-2, 57-72 頁。
- 川合泰代（2016）「日本人の聖地信仰と干支－「道」の陰陽五行思想からみる時間・空間感覚の再考－」E-journal GEO11-1, 188-198 頁。
- 川合泰代（2020）『聖地への信仰－地理学からのアプローチ－』古今書院。
- 喜多野徳俊（1995）『春日の神の石燈籠』近代文藝社。
- 品川教育委員会編（2002）『品川の富士講と山開き行事』品川教育委員会。
- 奈良市教育委員会（1995）『奈良市の絵画－奈良市絵画調査報告書－』奈良市教育委員会。
- 奈良市教育委員会（2002）『奈良市歴史資料調査報告書 18－東城戸町有資料－』奈良市教育委員会。
- 日本常民文化研究所編（1978）『日本常民文化研究所調査報告第2集 富士講と富士塚－東京・神奈川－』日本常民文化研究所。
- 日本常民文化研究所編（1979）『日本常民文化研究所調査報告第4集 富士講と富士塚－東京・埼玉・千葉・神奈川－』日本常民文化研究所。
- 村井古道（1740）（喜多野徳俊訳・注（1979）『南都年中行事』文功社）。
- 八島五岳（1835）「百家琦行傳」（原義胤編（1927）『先哲像傳・近世畸人傳・百家琦行傳』有朋堂, 655-824 頁）。
- 山田熊夫（1981）「春日講（しゅんにちこう）」まつり 38, 93-119 頁。
- 山と地図のフォーラム編（1999）『富士山展望百科』実業之日本社。

Cultural Region Related to Belief in Mountains in the Edo Period: Through a Comparison of *Shunnichi-kou* and *Fuji-Kou*

KAWAI Yasuyo*

This paper recreates the early modern Japanese people's sense of time and space through two examples of their belief in mountains. The *Sunnichi-Ko* in early modern Nara worshipped Mount Mikagayama and Mount Kasuga as sacred places. They believed that the mountain was located in the eastern, that the rituals were held in January, and that the mountain's lush spring scenery was proof of the presence of the gods and Buddha on the mountain. Through their rituals, they lived in a time and space unified by the culture of "life. On the other hand, the *Fuji-ko* in early modern Edo (Tokyo) worshipped Mt. Fuji was located in the south west part of the city, and the ritual of climbing the mountain was held in summer. The mountain was the paradise where Amida Buddha lived. Through their rituals, they lived in a time and space unified by the culture of "death. For the Japanese of the past, time, space, and people were all connected in one.

Key words: mountain, belief, space, time, sense, Edo period

*Part-time Lecturer at Komazawa, Tokyogakugei, Meijigakuin University E-mail : yasuyo28@mvp.biglobe.ne.jp